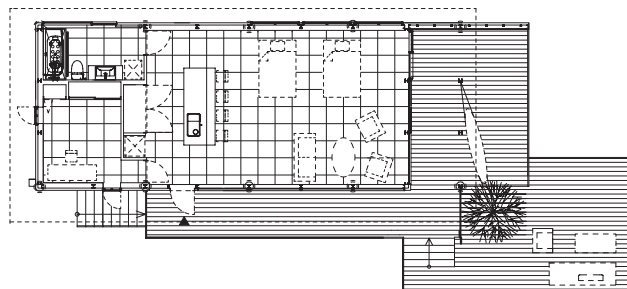


Text/Atsushi TAMADA

FLOOR PLAN

間口3スパン×奥行7スパン。面積は3×7＝21坪の高床式TYPE-Fでイメージする。海辺に建つ昼寝の家。地面の傾斜に関わらず、鋼管杭を打ち込んでその上に鉄骨土台とボディーを設置する。木製デッキの面積を十分とることが、この想定プランのポイントになっています。



高原社会のシフトダウンを体現した海辺に建つ“昼寝の家”

時間に追われるように経済成長を競っていた20世紀を忘れて、家づくりのメインテーマを変えてみませんか？
キーワードは“昼寝”です。少しは“生理的”な身体の要求に耳を傾けて……。

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK



家を建てる場所や目的をどんな理由で決めているか？ これは時代の変わり目に差し掛かっている現在、とても大切な問いかけです。20世紀のニッポンで高度経済成長下の給与所得者が30年以上のローンを組んで作り続けた“マイホーム”は、その場所選びの第1位は断トツで“通勤に便利な場所”ということだったでしょう。皆が皆、異口同音に同じことを考えた末、土地の値段は上がり、毎朝すし詰めの通勤電車で往復2時間以上我慢する。今から考えてみれば、これはとてつもない体力の消耗だったと思います。2時間の非生産的な時間。実にご苦労様でした。

しかし今、リモートワークが現実化し、人々や企業の考え方も多様化していく中で、可処分時間の2時間をどのように豊かに過ごすか？ ということが“家づくり”の上でも大きなテーマになり始めています。自分が元気がかつ、精神的に精神衛生を保てるインプット。例えばスポーツや読書や家族とのコミュニケーションなどなど、プラス要

素の時間ができるのはうれしい。しかし2時間のうち30分くらいは、身体の要求や快楽原則に時間を割いてあげてもいいのではないのでしょうか？

そこで有効なのが“昼寝＝積極的仮眠”です。人間の身体メカニズムは朝起きてから7～8時間で脳のオーバーヒートを防ぐためにいったん眠くなるようにできているそうです。眠いのはあなたが怠惰だからではないのです。せっかくですから昼寝は木陰のハンモックで、自然と一体化した“良い眠り”にしたいものです。波の音のリズムがかすかに聞こえる風通しの良い場所で誰にも邪魔されずに深い眠りを楽しみたい。そこで今回イメージしている家は、デイトナハウスオリジナル工法を用いた高床式平屋「TYPE-F」です。

海辺の砂地や少々の斜面ならば、コンクリートを一切使用せず鋼管杭を基礎にして、“ふわり”と浮かぶように建築可能です。コンセプトは“自然に寄り添う建築”。もともと育っている樹木も極力伐採しません。その木の枝をお借りしてハンモックを吊るすのです。茂った枝が、木陰を作ってくれるでしょう。時折吹く風にそよぐ木々の音も実に心地よい。自然に寄り添うことで、あなたの睡眠の質は一層素晴らしいものになるのです。漆黒の闇に包まれる夜の睡眠は、案外周辺環境と疎遠なものかもしれません。だとすれば、家を建てる場所の選定理由が、むしろ“ベストな昼寝”のできる場所だったとしても不思議はないのです。

これからますます認識される“高原社会”と言われる経済成長なき社会。あなたは少しだけムーミン谷のじゃこねずみさんに近づくのかもしれませんがね。

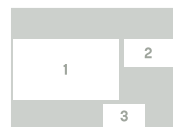
What's DAYTONA HOUSE?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm～4mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表 玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行っ

www.daytona-house.com



- 敷地内にある枝ぶりの良い樹木を伐採することなく、木製デッキに貫通させることができるのも高床式工法のなせる業。一気に自然との共生イメージを実感します。
- 寝室の二方向は、海に向かって大開口のガラスウォール、一方は質感のある壁、ミッドセンチュリースタイルと呼ばれる作法です。
- 段差を付けた木製デッキが自然との一体感をさらに増幅。この場所にアウトドアリビングな家具を配置して、更にチルな空間に仕立てたいですね。





リモートワーク技術の一般化と進展は、従来はリゾート地と認識されていた場所を、毎週末の生活の場所に変化。雄大な風景を前に、また森の中で鳥たちの声を聞きながらビジネスも両立できる理想的な暮らし。移動手段を内蔵した住居＝ガレージハウスであれば、無理なく頻繁に通うことができます。このパースは箱根と須走に現在建築中のガレージ賃貸住宅『GLB』のリゾートバージョンです。

21世紀の「遊動民」に最適な住まい、
「ガレージハウス」の再定義

「遊動民」とは、自らの意思で動き、動いた先での新鮮なインプットによって、新たなエネルギーを再生産するような種類の人々であると申し上げました。それでは、遊動民にとってのベストな住まいのカタチとはどのようなものなのか？ 前述の社会の変化を敷衍すれば、自由に自分の意思で移動する手段であるクルマやバイクを格納する空間と一体化した、いわゆる「ガレージハウス」の体裁は、遊動民にとって理想の形態の一つと言えるでしょう。

できれば移動手段の単なる格納場所に留まらず、移動の動機、すなわち行った先でのインプットのための道具、各種のギア類を同時に格納できる場所。そして日常的に私たちが触発してくれるようなガレージが望ましいのです。言葉を変えて言うならば、出撃基地ⅡBASE的なイメージの喚起を整えていること。それが論理的な帰結です。しかもリモートワークの普及は、所有型の別荘のみならず、賃貸別荘の可能性も拡大。ガレージハウスの賃貸化を促進する動きも生まれつつあります。

従来の「別荘」は、月1回の訪問がせいぜいの贅沢品と思われていました。使用価値もさることながら、他者への優越を示すステイタスとしての意味もあながち否定できませんでした。しかしリモートワークによって、「別荘」にしながら仕事も可能になり、サテライトのスペースの使用価値は今までにないほど増大しています。その結果、利用しつくすⅡベイできます。という認識が一般化し始めているのです。しかもいったんローンを組んで購入してし

また、ローン返済のためにライフスタイルは結構拘束されます。目的の明確化と頭の整理によって、できるだけ家に縛り付けられる。ことは避けたい。その意味では、賃貸という形式も今後の社会の変化の中では、遊動民の住まいの形式として有力な候補の一つだと考え得るのです。

「ガレージ賃貸住宅『GLB』は、単なるアパートの枠を飛び出し、時代的な新しい意味の獲得を目指します

Daytonaハウスが提案するガレージ付き賃貸住宅『GLB』は、鉄骨の骨格をそのまま露出させて、インダストリアル感満点のガレージ空間を実現した商品です。しかしこの商品のユーザーはスタート当初から特徴的でした。約50%以上の賃貸契約者が、すでに居住用の住まいを別の場所に保持している方なのです。つまり居住用としてはなく、何らかの別の目的で賃貸契約されているということなのです。

その意味では、結果的に今までのアパートの枠には収まりきらないポテンシャルを併せ持っているということかもしれません。事務所、店舗としての使用も多いですが、それに加えて特筆すべきは、自己使用のサテライトスペースとしての利用です。愛着のクルマ、バイクを格納しながら自分のインスピレーションに火をつけるための空間としての利用。これはいわば潜在的な需要が顕在化し始めているということだと言えます。リモートワークが普及した現在、GLBは一般にリゾート地と認識されるような場所、例えば箱根、富士山麓、ハケ岳山麓、淡路島、木更津などにも次々に建築され好評を博しています。これは明らかに、リ

モートワーク普及時代の二拠点生活が前提になっている需要です。昔の言葉でいえば「集合住宅形式の賃貸別荘」ですが、その古い言葉には収まり切らない新時代的な意味合いが含まれていると言えるでしょう。

まさに、自然環境が豊かな場所に価値を見出し、新鮮なインスピレーション獲得のための「能動的移動」と二拠点生活がそこでは目的化されているのです。1週間のうち2〜3日は、仕事も継続しながらリゾート地で過ごすということ。明らかにリモートワークが前提になっているのです。アフターコロナ時代の「遊動民」たちの鋭敏なアンテナは、使い古されたリゾート地のレッテルを逸脱して、今後ますます日本列島の豊かな自然に独自の価値を見出して続けていくと思われる。そう考えなく、そろそろ「別荘」という呼び名ではなく、賃貸形式も含めたサテライト住居の新しい名称がでてもいいタイミングなのかもしれません。リモートワークの普及とそれによる人々の意識の変化は、「住宅・家づくり」の再定義をも迫るポテンシャルを内包した社会現象なのかもしれません。



島根県出雲市の海を見下ろす海岸に立つ「オーシャンベース 鋼」。ガレージ付き宿泊施設として開業以来、高い人気を維持している施設です。これと全く同じ仕様で賃貸別荘への転化も可能です。現地用の愛車をガレージ内に保持した上で、飛行機で東京からでも1.5時間なので、週末住宅として十分成立可能。ここから見る日本海の夕陽は季節ごとにそれぞれ素晴らしいものです。



関西圏においては、すでに淡路島の洲本海岸に賃貸別荘タイプのGLBが稼働中。明石大橋を渡れば大阪から2時間以内で別天地に。目の前には美しいビーチが広がります。金曜に来て月曜夜に帰る使い方も現実的。

リモートワーク時代とデイトナハウス “能動的な移動”と家づくりの “新しいカタチ”とは？

社会の本質的な変化、20世紀から21世紀への過渡期を象徴する
リモートワークの普及。それは“家づくり”に関する
根本的な発想の転換を迫っているのかもしれない。



リモートワークの普及による「距離を超越したライフスタイル」の成立は、21世紀初頭の画期的事件だ！

人類が文明化されて以降、そして現代の生活やビジネスにとっても「距離」は考慮すべき条件として重要なファクターでありました。そもそも土地の価格Ⅱ価値も、中心との「距離」によって序列化されている現状があります。

距離は生活やビジネスの成立条件の重要な「物差し」であったのです。しかし、デジタル技術の進化がもたらしたリモートワークの普及は、「距離」を超越したビジネスやライフスタイルの成立の可能性を示し始めました。

リモートワークの一般化は、当初コロナパンニックによる仕方ない措置でありましたが、一旦そのツールに慣れてしまつて、様々なプラスメリットを人々

は感じ始めて、逆に困惑した方もいらっしゃるでしょう。それは「距離」という物理量が、時間軸やモノの値段、カルチャーの伝搬に至るまで、様々な数値のベースにあったからです。しかしリモートワークの普及により、世界は長年使い慣れた「物差し」に変化が生じていると考えられています。事実、現役バリバリの感度の高い人たちが自然豊かなエリアに移住したり、都心と

リモートワークが一般化するアフターコロナの社会は、通勤のような嫌でも仕方なく繰り返す「受動的な移動」と、アクティブに自分の意思で行う「能動的な移動」の違いが、従来以上にはっきり区別される時代だと言えるかもしれません。リモートワークが普及すればするほど、少なくとも「受動的な移動」の必要性は半減し、今後は年々減少していくのです。ということは、移動の動機を自ら持ちえない人々は、リモートワークの普及によって、むしろ「閉じて、引きこもる」方向に行つてしまふ可能性があるということです。

一方、「能動的な移動」をすでにライフスタイルに取り入れている人にとっては、リモートワークは実にありがたいテクノロジーです。何しろどこに居ようが、自分の存在証明が可能になり、ビジネスや生活が成立するのですか

ンプット」が、新たなインスピレーションの源泉になり、また精神的に「動く」。このプラスサイクルが、「遊動民」のエネルギー源なのです。モーターライフⅡ愛するクルマ、バイクと共生する生活は、その移動手段との共生という意味で、今まで以上に、時代の変わり目をしなやかに乗り越えるパワーとしての新しい位置づけを獲得しているのかもしれません。



ら。そして常々デイトナハウスが「遊動民と呼んでいるのは、このようなタイプの人々です。自分の意思で移動しながら考える人、移動そのものを楽しんでしまう人です。ですから移動それ自体にその人なりの確たる動機があるのです。誤解を恐れずいうならば、その動機の源泉は、あくなき好奇心であると言えるかもしれません。動きそこで目にした事柄によって得る「新鮮なイ

Text/Atsushi TAMADA

総延長約500キロメートルの路線距離を有する関西私鉄の近鉄グループと、デイトナハウスの高架下ガレージハウスプロジェクト第2弾「K・BLOC HARINAKANO」が、満を持して、いよいよ賃貸募集をスタートしました。このプロジェクトでは、従来の高架下のイメージを超越した、新しいタイプの、鉄道と住生活の接点」を模索しています。それは既存の鉄道インフラとモーターライフの融合とも呼べる21世紀型の発想なのです。

高架構の柱脚間の比較的広い面積を自由に独り占めで使用できること。それだけでも十分メリットがあります。しかし今回の企画の主眼はそれに留まらず、デイトナハウスが従来から提唱してきた「遊動性」をその生活に一体化させていくこと。それにこそ魅力の中心があるのです。自分の意思で自由に移動するためのクルマやバイクを格納できる喜び。いわば都市インフラの「利便性」と自由な「遊動性」を合体させた、新しい生活のカタチなのです。

K・BLOC HARINAKANOは、戸建て賃貸タイプなので、隣の住戸へのエンジン音などの配慮も最小限で済みます。また、鉄骨のインダストリアル感を最大限表現したガレージにプラスして、戸外の洗車可能な駐車スペースも確保。まさに複数台持ちのモーターフックにとっては、嬉しい仕様となっています。更に大阪中心部に近い、針中野という立地も魅力的です。近接する駒川商店街は大阪らしい活気を今も保つ現役商店街。時代の変化も意識しながら、20世紀型の都市インフラを別観点から利用しきってしまおうという試み。それはまさに、「時代の狭間」に成立する賢いライフスタイルを象徴する住居形式なのです。



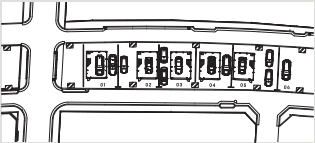
近鉄×デイトナハウス共同企画第2弾

鉄道インフラとモーターライフが高次元で合体!!
近鉄高架下ガレージハウスに見る都市の新解釈

前回好評だった鉄道×モーターライフのコラボレーションの第2弾が大阪針中野で遂にスタート。
近未来を意識しながら20世紀型都市インフラを改めて味わい尽くす“イトコドリ”の賢い住居形式です。

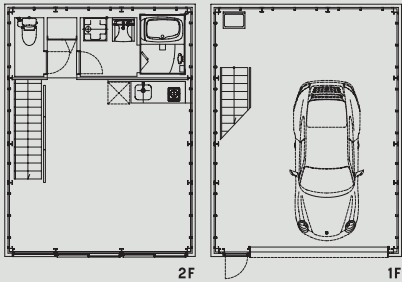
K・BLOC HARINAKANO

所在地	大阪府大阪市東住吉区鷹合4丁目89-3の一部
敷地面積	672.6㎡
延床面積	330.40㎡
構造・規模	軽量鉄骨造2階建
総戸数	5戸
住戸面積	66.08㎡(ガレージ幅約4.9m×奥行約6.6m)
交通	近鉄南大阪線「針中野」駅から徒歩7分 阪神高速14号松原線の駒川入口まで7分
竣工時期	2023年8月予定
入居開始時期	2023年9月予定
貸主	近鉄不動産株式会社
企画	近鉄不動産株式会社/株式会社LDK(共同プロジェクト)
設計&施工	近鉄不動産株式会社
賃料	22万円



OFFICIAL HP

FLOOR PLAN



戸建て賃貸タイプでプライバシー重視。今回賃貸募集戸数は5世帯です。各住戸は間口2.5スパンなので車幅の広いクルマでも安心で、隣の住戸へのエンジン音などの配慮も最小限で済みます。庫内には複数のバイクやアウトドアギアも悠々格納可能。階段は螺旋タイプではなく直階段を採用しています。



建物のファサードはワイドなガラスウォール。下からスケルトンの鉄骨骨組みが浮かび上がります。不思議な近未来感覚のデザインが下町に突如出現。隣接する駒川商店街は大阪三大商店街の一つと言われる活気ある場所。この2つの要素がつくる相乗効果は、さながらブレッドランナーのイメージですね。



デイトナハウス×LDKのガレージは、単なるクルマの置き場ではなく、クルマ好きにとってのメインリビングともいえる空間です。露出する鉄骨のリアル感を上手に利用しながら、工具類やアウトドアのギアをディスプレイする。そのようなユーザーを想定しています。